

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	地域博物館活動に関する意識調査報告：地域博物館は市民活動のコアになりうるか
Author(s)	小出, 美由紀; 浅野, 敏久
Citation	エコミュージアム研究, 20 : 58 - 64
Issue Date	2016
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045698
Right	Copyright (c) 2016 日本エコミュージアム研究会
Relation	



● 報告 ●

地域博物館活動に関する意識調査報告

～地域博物館は市民活動のコアになりうるか～

小出 美由紀・浅野 敏久

広島大学大学院生・広島大学

1. はじめに

地域社会が抱える課題の解決や地域の特色を生かしたまちづくりを進めるために、市民の積極的な関与、市民参加が強く求められるようになっていく。実際に具体的な地域において、市民参加による活動を積極的に進めるために、それをコーディネートする人材や受け皿となる組織の果たす役割は大きい。ただし、それで十分なわけではなく、例えば、活動を担う市民が集まる具体的な「場所」があることも重要である。筆者らはそのような場所のひとつに地域博物館がなりうるのではないかと考えた。

戦後の地方での博物館設立の動きの中には、利用者自身が主体的に博物館を作り、運営にかかわる、地域からの博物館づくりと評価できるものがある（注1）。伊藤寿朗は地域に根ざした活動を行う博物館を「地域博物館」と呼び、「地域に生活する人びと、一人ひとりの問題関心や生活課題に、市民とともに、博物館の機能を通して応えていこうとする考え方」と定義している（注2）。また、浜口哲一は、「放課後博物館」の考え方を提唱した（注3）。これは年に何回も足を運んで展示を見直したり、行事に参加したりするような博物館のことで、市民に日常的に開かれ、市民とのつながりが持てる地域博物館への期待が表明されている。地域をまるごと博物館にとらえ、地域資源を活用し、住民主体の地域づくりを志向するエコミュージアムにおいて、このような場所は、エコミュージアムの基本的な構成要素である「コア」になる場所と考えられ、活動の拠点

となることが期待される。

筆者らは、地域博物館が地域の自然資源や文化資源を保全する市民活動の拠点となり得るか、どうすれば地域博物館がそのような役割を担えるようになるかに関心を持っている。この関心は、エコミュージアム研究においてもコアのあり方を論じることにつながる。しかし、これまでのエコミュージアム研究において、コアの実例が紹介されることはあっても、コア施設のあり方に焦点をあてて、その機能を評価する議論は深められてこなかった。そこで本稿では、エコミュージアムのコアのあり方を考えることを念頭におきつつ、今後の可能性検討の前提として、地域博物館を人々がどのように利用し、どのような期待を持っているのか、特に市民活動の拠点とすることについてどのくらいの期待を抱いているのかを確認しようと試みた。コアを論じること意識していると書きながらも、本稿で扱おうとしていることは、具体的なコア施設の機能を事例調査により分析するわけではなく、意識調査にとどまるものなので、ほんの入口のような情報かもしれない。それでも、地域博物館が一般的にどう思われているのかというところからはじめてみようと考えたわけである。

なお、今回は、地域博物館を利用したことのない人やエコミュージアムについて知らない人も含めた一般市民を対象とした。地域博物館やエコミュージアムをよく知らない人を対象として、そのイメージを質問しても、実態に即した評価はできないし、抱いているイメージ的を射たものではないかもしれない。しかし、これらが普及していくためには、そのような層への働きかけが必要であり、この層が言葉だけからどのようなイメージを抱いているのか

を知ることは、今後の活動の進め方を検討する上で意味のある情報になると考えた。

2. 調査方法

調査の方法としては市場調査などに広く使われているウェブアンケート調査を採用した。社会調査会社の抱えるモニターを母集団として、その中から性別、年齢、居住地などをバランスよく抽出し回答を依頼する。この手法に関しては、回答者がインターネット利用者に限られるためサンプルの偏りに注意が必要だが、個人情報保護の観点から従来型調査（郵送調査等）の回収率低下が問題になる中、安定した回答数が得られるという利点がある。国内に120万人のキューモニター（2014年12月時点）を有する株式会社インテージに調査を依頼し（注4）、博物館と地域社会とのかかわりを探る主旨のもとアンケート調査を実施した。実際の調査では地域博物館だけではなく、大学博物館についても質問しているが、本稿では地域博物館に関する回答結果のみを抽出して言及する（注5）。調査の実施期間は2014年3月20～24日で、全国の20代～60代のモニター登録者に回答を依頼し、1,080件の有効回答を得た。属性については、ウェブ調査の特性上、男女比や年齢比は想定したとおりの構成比で回収される。性別は男性が49.8%、女性が50.2%、年齢層の割合は20代が19.7%、30代が19.8%、40代が20.1%、50代が20.4%、60代が20.0%であった。職業は、会社員（管理職以外の正社員）が22.6%ともっとも多く、続いて専業主婦/主夫が21.3%、パート・アルバイト・フリーターが12.8%であった。また、居住地を大都市圏と地方圏に区分したところ（注6）、大都市圏の割合は48.5%（地方圏は51.5%）であった。

まず、地域博物館を利用する際にもっとも重視することをたずねた。アンケートでは地域博物館を以下のように説明した。「地域博物館とは、地域の自然や文化、歴史に関する資料の収集、調査研究、展示、教育を行う博物館のことです。地域文化の向上、地域の歴史・文化の保存、地域環境の保全、住民への生涯学習の機会の提供を目的としています」。選択肢として「学術的・専門的な知識」「地域の理解」「生活のうまいやすらぎ」「趣味、娯楽」「子どもの教育」「人々との出会いや交流、仲間づくり」「市民活動」「特に重視することはない」「利用しない・利用したことがない」「その他（自由に記述してもらおう）」の10項目を用意した。回答者にはこの選択肢のうち1つを回答してもらった。

地域博物館を利用する際に重視することとして上位を占めたのは「学術的・専門的な知識」（18.1%）、「趣味、娯楽」（16.5%）の2項目であり、これが博物館の2大利用目的となった（図1）。つまり、多くの市民は、地域博物館を専門的な知識が得られる「学術・教育施設」、または休日、余暇を過ごすための「観光・レクリエーション施設」としてみなしているといえるだろう。一方で、「人々との出会いや交流、仲間づくり」（3.8%）、「市民活動」（1.1%）の項目への回答はわずかであった。地域博物館を地域の人々との交流の場、あるいは市民が活動する場と考える人は非常に少なく、そのようなニーズは、今のところではほとんどないという結果であった。

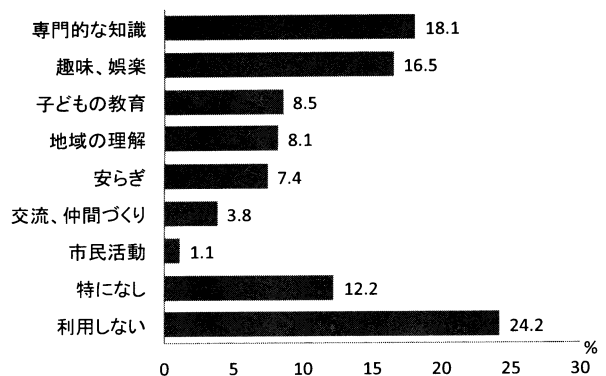


図1 地域博物館利用時に求めること

注：設問は「地域博物館を利用するときに、あなたがもっとも重視することはなんですか。もっとも重視することを1つ選んでください（回答は1つ）」であった。

3. 地域博物館のイメージとそれへの期待

（1）地域博物館利用時に求めること

表1 性別と年齢別にみた地域博物館利用時に求めること

		N=1,080, 割合%								
性別	年齢層	専門的な知識	地域の理解	安らぎ	趣味、娯楽	子どもの教育	交流、仲間づくり	市民活動	特になし	利用しない
	全体	18.1	8.1	7.4	16.5	8.5	3.8	1.1	12.2	24.2
男性	20代	21.9	9.5	5.7	14.3	2.9	1.0	1.0	14.3	29.5
	30代	15.9	4.7	2.8	16.8	11.2	4.7	0.9	15.0	28.0
	40代	19.4	8.3	0.9	20.4	11.1	4.6	0.0	12.0	23.1
	50代	22.0	7.3	7.3	24.8	4.6	3.7	0.9	14.7	14.7
	60代	21.1	20.2	8.3	13.8	1.8	2.8	3.7	5.5	22.0
	小計	20.1	10.0	5.0	18.0	6.3	3.3	1.3	12.3	23.4
女性	20代	13.9	4.6	10.2	18.5	11.1	2.8	0.9	14.8	23.1
	30代	16.8	2.8	2.8	10.3	25.2	4.7	0.0	10.3	27.1
	40代	15.6	0.9	4.6	18.3	13.8	3.7	0.0	15.6	27.5
	50代	16.2	9.9	18.0	15.3	1.8	3.6	2.7	12.6	19.8
	60代	17.8	13.1	13.1	12.1	1.9	6.5	0.9	7.5	27.1
	小計	16.1	6.3	9.8	14.9	10.7	4.2	0.9	12.2	24.9

次に、選択肢と回答者の属性をクロス集計し、属性による傾向をみた（表1）。ここでは「特に重視することはない」「利用しない・利用したことがない」「その他」を除く7つの項目への回答を対象とした。地域博物館の利用において重視する項目は性別による大きな違いはみられなかった。年齢層では、全体的に50代、60代がその他の世代に比べて高い割合を占めた。そのほか目立った特徴としては、30代、40代の男女が「子どもの教育」を選択する割合が高かった。幼い子どもを持つ親世代がこの項目を支持していると考えられる。また、「地域の理解」という選択肢において60代の支持が、全体平均（8.1%）の2倍の16.7%と高くなった（男性20.2%、女性13.1%）。

博物館が市民活動の拠点になりうるかに関連し、「人々との出会いや交流、仲間づくり」と「市民活動」の選択肢を選んだ人の性別・年齢別の特徴に注目した。市民活動の場として期待している人は60代男性（3.7%）と50代女性（2.7%）に多かった。交流の場として期待しているのは60代女性にもっとも多く、30代、40代がそれに続く結果となった。

（2）博物館活動への参加意向

地域博物館が提供する一般的な活動を挙げ、それらの活動への参加意向を5段階評価で尋ねた。選択肢として用意したのは、「常設展示や企画展示」「自然観察会や工作など

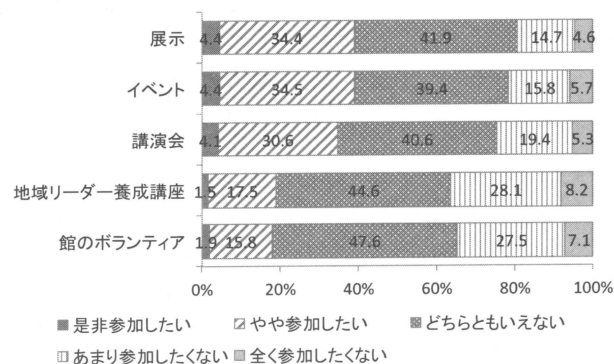


図2 地域博物館活動への参加意向

注：設問は「あなたは次に挙げる地域博物館の活動に参加したいですか（回答は1つ）」であった。

のイベント」「専門家による講演会」「環境活動の地域リーダー養成講座」「館のボランティアサークルに所属した上での運営支援」の5項目である。参加したい（「是非参加したい」＋「やや参加したい」と回答した割合は、「自然観察会や工作などのイベント」（38.9%）と「展示（常設展示や企画展）」（38.8%）がほぼ同数で上位となり、「専門家による講演会」（34.7%）が続いた（図2）。一方で、「地域リーダー養成講座の受講」と「博物館のボランティアに所属した上での運営支援」については、参加したい人よりも参加したくない（「あまり参加したくない」＋「全く参加したくない」）人が上回る結果となった。

表 2 性別と年齢層別にみた地域博物館活動への参加意向

	N=1,080, ポイント(注)				
	常設展示や 企画展示	自然観察会や 工作などの イベント	専門家による 講演会	環境活動の地域 リーダー養成講座	館のボランティア サークルへ所属した 上での運営支援
全体	3.19	3.16	3.09	2.76	2.78
男	3.17	3.12	3.11	2.83	2.78
女	3.21	3.20	3.07	2.69	2.78
20代	3.13	3.03	2.96	2.75	2.77
30代	3.14	3.20	2.98	2.75	2.78
40代	3.07	3.06	3.00	2.69	2.70
50代	3.28	3.13	3.11	2.66	2.74
60代	3.33	3.38	3.38	2.94	2.92
大都市圏	3.12	3.14	3.03	2.74	2.73
地方圏	3.26	3.18	3.14	2.78	2.83

注)「是非参加したい」を5,「全く参加したくない」を1とする5段階評価に換算し、その平均点を示した。

この結果から、展示を見学する、イベントに参加する、講演会を聴くといった、博物館利用者が「お客さん」の立場として受け身で関わるプログラムには比較的に高い参加意向が示されるが、地域リーダーや博物館ボランティアといった、能動的な活動を期待されるプログラムへの参加意向は低いことがわかる。しかしながら、「地域リーダー養成講座」「博物館の運営支援」に「参加したい」と肯定的に回答した割合がどちらも約 20%を占めており、全体の 2 割程度の人は地域活動の担い手としての参加意向があることもわかった。

属性による傾向を概観する。ここでは、活動項目ごとに 5 段階評価を得点化し、その平均点を求めた(注 7)(表 2)。数字が大きいほど、当該活動への参加意向が強いことを意味する。ここでは本稿の関心である、博物館と市民活動に関係する項目について言及したい。地域リーダー養成講座への参加意向は女性よりも男性、年齢層は 60 代が圧倒的に高くなった。博物館の運営支援への参加意向は性別による差はなく、年齢層は地域リーダー養成講座と同じく 60 代が高かった。また、どちらの活動項目においても 40、50 代よりは 20、30 代の若年層の参加意向が高かった。居住地では大都市圏よりも地方圏の割合が高くなった。つまり、市民活動への参加意向が強いのは 60 代が圧倒的に多く、特に 60 代男性は「学べる企画」への参加意欲が強い。60

代ほど強くはないものの、若い世代にも活動への参加意向があることがわかった。

(3) 地域資源の保全と博物館の関わり方

地域の自然や文化の保全活動に、地域博物館がどのように関わっていけばよいかを尋ねた。用意した選択肢は「地域の自然や文化についての研究を行う」「環境教育・郷土教育につながる講座や教室をひらく」「地域の情報を収集・発信する情報センターとなる」「行政や市民からの照会に対して、関連する研究者を紹介するなどの相談窓口となる」「保全に関心を持つ研究者や学生に研究・教育の場を提供する」「市民グループやボランティアに活動の場や機会を提供する」「博物館は地域の自然や文化の保全に関わる必要がない」の 7 項目である。当てはまる(「とても当てはまる」+「やや当てはまる」と回答した人の割合が高かったのは、「地域の自然や文化についての研究を行う」(62.1%)、「環境教育・郷土教育につながる講座や教室をひらく」(59.1%)であり、続いて「保全に関心を持つ研究者や学生に研究・教育の場を提供する」(54.2%)「地域の情報を収集・発信する情報センターとなる」(52.5%)の項目で 5 割を超えた(図 3)。この結果から、地域博物館が地域資源の保全活動に関わる際には、主に「研究」と「教育」の機能を期待されていることがわかる。博物館と市民活動に関係する項目として、ここでは「市民グループ

表3 性別と年齢別にみた地域資源保全と博物館の関わり

N=1,080, ポイント(注)

	研究	講座や教室	情報センター	相談窓口	研究者に研究・教育の場を提供	市民に活動の場や機会を提供	関わる必要はない
全体	3.61	3.54	3.44	3.23	3.46	3.27	2.65
男	3.55	3.48	3.40	3.17	3.43	3.20	2.67
女	3.67	3.61	3.49	3.29	3.49	3.34	2.64
20代	3.53	3.41	3.38	3.19	3.35	3.27	2.78
30代	3.55	3.42	3.28	3.14	3.38	3.19	2.82
40代	3.57	3.53	3.41	3.16	3.46	3.27	2.58
50代	3.58	3.58	3.52	3.27	3.49	3.26	2.54
60代	3.82	3.78	3.63	3.40	3.63	3.36	2.55
大都市圏	3.60	3.50	3.40	3.18	3.42	3.23	2.72
地方圏	3.62	3.58	3.48	3.28	3.50	3.30	2.59

注)「とても当てはまる」を5,「全く当てはまらない」を1とする5段階評価に換算し、その平均点を示した。

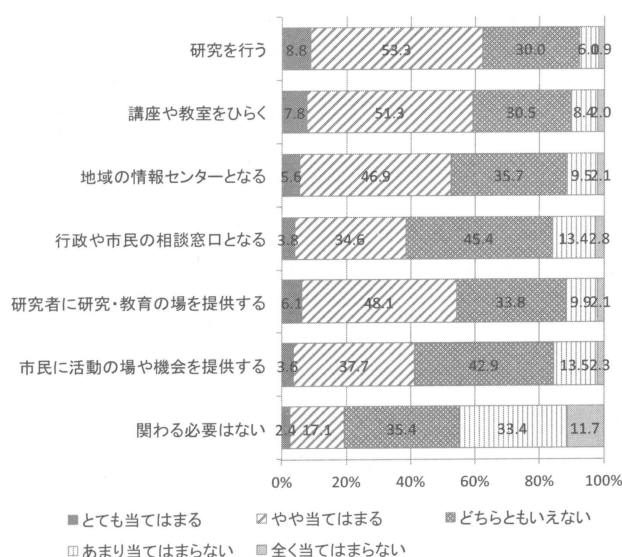


図3 地域資源の保全と博物館の関わりについての評価

注：設問は「地域博物館が、所在する地域の自然や文化の保全との関わり方として、以下の手段は、どの程度当てはまると思いますか（回答は1つ）」であった。

やボランティアに活動の場や機会を提供する」という選択肢への回答に注目したい。「当てはまる」という回答は41.3%, 当てはまらない（「あまり当てはまらない」＋「全く当てはまらない」という回答は15.8%であった。肯定的な意見が約4割を占めており、地域資源の保全活動において、市民活動の拠点としてもある程度の評価がなされている。属性別の傾向を、前問と同様に5段階評価を得点化して平均点を求めた（表3）。「市民グループやボランティアに活動の場や機会を提供する」ことを支持する人の特徴は、性別では男性よりも女性が多く、年齢層では60代が

多い。20代、40代、50代の間に差はなく、30代の支持は低かった。居住地では大都市圏よりも地方圏の割合が高くなった。

（4）地域博物館のエコミュージアムの展開について

ここでは、地域博物館がエコミュージアムの機能を持って展開することにおいて、どのくらいの期待がなされているのかを検討する。設問では異なる性格を持つ3つの博物館のあり方を示し、各博物館の将来性を尋ねた。

第一のタイプは「研究者である学芸員と設備の整った博物館施設（建物）を有し、資料の収集・保存に力を入れるとともに、来館者に地域の自然や歴史・文化の知識を伝える博物館」である。本稿では便宜上「従来型博物館」とする。第二のタイプは「時間ができた時に問い合わせに行くとか、年に何度も足を運んで展示を見直したり、教育普及活動に参加したりするなど、日常的なつながりをもてる『放課後博物館』（注8）」である。第三のタイプは「まとまった施設を持たず、地域の自然資源や文化資源を、住民と研究者が共同して、それらが本来存在していた現場において保存・活用する『地域まるごと博物館』（注9）」であり、エコミュージアムに相当する選択肢である。

将来性がある（「とても将来性がある」＋「やや将来性がある」と回答した割合を検討したところ、従来型博物館（53.1%）、放課後博物館（45.2%）、地域まるごと博物館（37.9%）の順に将来性が高いと評価された（図4）。

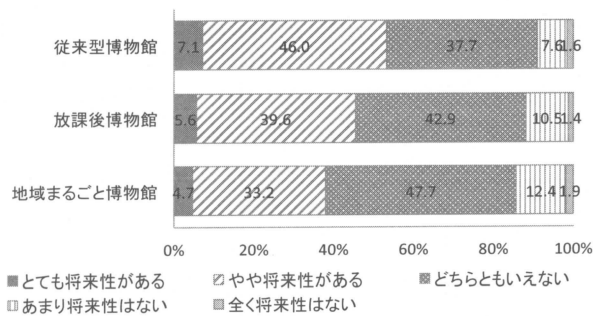


図 4 地域博物館の展開方向に対する評価

注：設問は「いくつかの地域博物館のあり方を示します。それぞれの地域博物館のあり方の将来性について、あなたはどのように評価しますか（回答は1つ）」であった。

表 4 性別と年齢層別にみた地域博物館の展開方向

	従来型博物館	放課後博物館	地域まるごと博物館
全体	3.50	3.38	3.26
男	3.44	3.30	3.21
女	3.55	3.45	3.32
20代	3.38	3.24	3.27
30代	3.43	3.34	3.20
40代	3.48	3.36	3.22
50代	3.48	3.42	3.21
60代	3.70	3.52	3.42
大都市圏	3.49	3.37	3.30
地方圏	3.50	3.38	3.23

市民が期待する博物館像は、現状では従来型の学術的な博物館であり、住民が活動の主体となる地域まるごと博物館への期待は低い結果となった。

次に属性別の傾向を表 4 に示す。性別では 3 タイプすべての博物館で男性よりも女性のほうが支持が高かった。年齢層では、従来型博物館と放課後博物館については同じ傾向を示した。60 代の支持がもっとも高く、年代が若くなるほど支持が低くなり 20 代の支持がもっとも低くなった。地域まるごと博物館は 60 代に続いて 20 代に多く支持される結果となり、30－50 代の差はほとんどなかった。また、居住地別では、従来型博物館と放課後博物館は大都市圏、地方圏の差はなかったが、地域まるごと博物館は大都市圏居住者のほうがより支持する結果となった。

4. おわりに

以上の結果をまとめると、地域博物館に対する一般市民のイメージや期待、活動への参加意識について次のことが指摘できる。地域博物館は基本的には、展示や講演会などを通して専門的な知識が得られる「学術・教育施設」、子どもに知的体験をさせたり、自らの知的好奇心を満たしたりするための「観光・レクリエーション施設」と思われている。属性別にみると、地域博物館に関心を持つ世代は 60 代であり、30 代、40 代は子どもを介した博物館活動への関与が考えられる。地域の環境保全活動に地域博物館が関わることが期待されており、その際、研究機関としての役割、教育・普及啓発の拠点としての役割が求められている。

「放課後博物館」や「地域まるごと博物館」のような、地域住民が積極的に博物館活動に関与しながら運営が行われる博物館よりも、「従来型博物館」への支持が高かった。「従来型博物館」は伊藤寿朗が唱えた博物館三代論（注 10）の第一世代・第二世代の博物館像にあたり、専門の研究者（学芸員）による収集保存、調査研究、教育普及という従来の博物館固有の機能に即した活動が展開され、資料の保存と公開が運営の軸となる。利用者との関係は博物館側からの知識の教授が中心となる。本アンケートの結果で多くの人は展示見学やイベント参加といった受動的な関わりを求め、地域活動の担い手を期待されるものには消極的であった。一般市民からみた地域博物館像は、第一・二世代のような古典的なイメージがまだ強い。地域博物館のエコミュージアム的な展開への期待は低い、エコミュージアムとしての博物館像が 20 代の若年層に支持されている点は興味深い。

市民活動が展開される場所としての期待は低い結果となったが、その中で、特に 60 代の高齢者については活動への参加意向が高かった。定年退職や子育ての終了を迎える世代であり、地域博物館の活動に自身の新たな社会的役割を求めていると考えられる。女性は博物館を利用する際に「仲間づくり」を重視し、「安らぎ」を求める傾向がある。男性は「学習」への欲求が高く、「地域活動の担い手」

となることを志向している。博物館活動に市民を巻き込んでいくためには、高齢者層のこのようなニーズに沿った活動展開も必要かもしれない。

以上のように、本調査では地域博物館の現状での利用のされ方を反映して、従来からの博物館のイメージが一般的で、かつそれが支持されている（地域博物館はそういうものだ）と認識されていることが確認された。そして、市民活動の拠点にするような新しい動きや可能性は、あまり期待されていない、あるいは市民活動と地域博物館を結びつけて考えられる人は少ないという結果でもあった。このことは、筆者らが当初に期待した、地域博物館を地域づくりやエコミュージアム活動の拠点の一つにできないかという発想は、今のままでは簡単には実現できない考えだったといわざるを得ない。まずは、固定化してしまっている地域博物館のイメージを変えていくことが、地域博物館の活性化のためにも、地域博物館をコアとしたエコミュージアム活動の展開のためにも、大事な課題である。そのためには、地道に実績を積み重ねることとともに、効果的な宣伝や情報発信を続けて、博物館のイメージを変えるという作業が必要になるといえよう。

注

- (1) 布谷知夫 (2005)『博物館の理念と運営－利用者主体の博物館学』雄山閣。
- (2) 伊藤寿朗 (1986) 地域博物館論。長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店、233-296. の 263 頁。
- (3) 浜口哲一 (2000) :『放課後博物館へようこそ－地域と市民をむすぶ博物館』地人書館。
- (4) 公称ではなく実際のところは、この 1/3 程度のモニターが実働モニターになっているとのことである (2014 年 5 月 26 日担当者への確認による)。
- (5) 大学博物館に関する調査結果は、浅野・小出 (2014) 大学博物館のイメージに関する調査結果。総合博物館研究報告 (広島大学)、6 (印刷中)。
- (6) 東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、愛知県、大阪府、京都府、兵庫県を大都市圏とし、その他を地方圏と区分した。

- (7) 各項目について、「是非参加したい」を 5 点、「やや参加したい」を 4 点、「どちらともいえない」を 3 点、「あまり参加したくない」2 点、「全く参加したくない」を 1 点とし、得点の平均値を表示した。
- (8) 放課後博物館の概念については、前掲注 3 の浜口 (2000) を参考にした。
- (9) 全国各地でエコミュージアム活動が実践される際に、「地域まるごと博物館」や「フィールドミュージアム」などと呼称されることも多い。今回は、地域全体を博物館とみなすという博物館像をよりイメージしやすいように「地域まるごと博物館」という単語を用いた。
- (10) 伊藤寿朗 (1991) :『ひらけ、博物館』岩波ブックレット。